松原歴史ウォーク

vol.230

立部の阿湯戸池

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲立部遺跡出土の土師器類（平安時代、松原市教育委員会提供）

▲昭和33年当時のため池　2、4、7は潰廃。3は南半分が潰廃。

▲阿湯戸池（立部4丁目）　現在、池は水上ゴルフ練習場に利用されている。

▲阿湯戸池全景　池の北の森は、上の池跡の大塚野外活動広場。

反正天皇の丹比地方生誕伝承と立部の湯戸による産湯奉仕伝承

立部四丁目と羽曳野市野にまたがって、阿湯戸池が広がっています。立部・上田と、羽曳野市に属する東大塚（現南恵我之荘）の三地域の田畑に水を潤しています。

江戸時代末期の天保十四年（一八四三）七月に書かれた『河州丹北郡立部村明細帳』には、同村にある地蔵池（府営立部団地で潰廃）や新池（府道中央環状線で潰廃）とともに阿湯戸池が記されています。池の広さである池床は五町余とあり、二町八反余りが立部村領で、残りの二町ほどが野村領内にあるとします。そして、立部村・東大塚村・松原村の三ケ村が立合い、つまり水利権を持っていると書いています。当時、上田は岡や新堂とともに、松原村を構成していたので、松原村と表記されたのです。

上の地図は、昭和三十三年（一九五八）当時の市域東南部から中央部にかけてのため池の模式図です。仮につけた番号で、立部―西大塚―新堂―上田―阿保を南から北へ、1が阿湯戸池、2は上の池、3は今池、4は小治ケ池、5は樋野ケ池、6は寺池、7は稚児ケ池、8は海泉池です。不整形な池がみごとに一列に並んでいます。

これらの池は、羽曳野丘陵から派生する沖積段丘上の平坦面である中位段丘面が開析されてできた浅い谷を堰きとめて造成されたものです。開析谷は幅一五〇メートル、延長三キロメートルにも及びます。とくに、阿湯戸池は二つの谷が合わさったところにつくられました。今から一四〇〇年前、六一六年ごろにできた狭山池（大阪狭山市）の中樋から水をうけ、東除川と西除川の間の微高地を灌漑する用水路網の一つとなっています。

阿湯戸池の西に広がる立部地域は、府道中央環状線の開通などに伴う発掘によって飛鳥時代・奈良時代・平安時代から中世にかけての建物跡や遺物が数多く検出されており、脈々と集落が営まれていたようです。ダム式ため池である狭山池が完成した飛鳥時代以降、池下にあたる北部の美原や松原地方にも順々にため池が見られるようになりました。古代にはすでに立部のムラが形成されていたようですので、阿湯戸池も平安時代ごろまでには谷筋を利用して水が貯えられ、生産力の向上とともに、中世・近世にかけて池の面積も広がっていったと思われます。

ところで、阿湯戸という珍しい池名はどこから名づけられたのでしょうか。私は、立部の地名伝承から推論できるのではないかと考えています。

立部は五世紀前半、十八代反正天皇が今の柴籬神社（上田七丁目）あたりに丹比柴籬宮をおいたと伝えることに伴い、地名を冠して多遅比瑞歯別と呼ばれた天皇が、後世、立部・上田を含む丹比地方で生まれたと流布されるようになりました。なかでも、立部は天皇のために、産湯を用いたり、土師器づくりに奉仕した集団がいたと古くから伝承されていました。彼らは、天皇の名にちなんで、蝮部（丹治比部）とよばれて天皇に仕えたとされ、この蝮部から立部の名が起こったとも言われています。

反正天皇の父は仁徳天皇ですが、古墳時代の大和国家のころ、主に地方出身の女性が皇子などに産湯を使わせて養育にあたる湯坐として奉仕することがありました。湯坐は湯坐部という組織に組みこまれ、集団として戸という集落単位を形成していました。それが湯戸です。蝮部の居住地と考えられる立部に湯坐、つまり湯戸があって、幼い反正の養育にあたっていたという言い伝えが近世前後ごろ同地に広まっていたのではないでしょうか。

この湯戸に接頭語的な「あ」を付して阿湯戸としたと想定されます。古代遺跡が広がる立部の集落と密接に関わってきた灌漑池の北堤は、今ではゴルフ練習場に利用されています。また、その北に連がっていた上の池は大塚野外活動広場や大塚運動広場に転用され、今池の南半分も府立大塚高校になりました。